

【図書紹介】

ヘレン・M・ガンター著
『教育のリーダーシップとハンナ・アーレント』

(末松裕基・生澤繁樹・橋本憲幸訳、春風社、2020年)

末松 裕基

(東京学芸大学)

本書は、英国マンチェスター大学教授のヘレン・M・ガンター (Helen M. Gunter) によって書かれた *Educational Leadership and Hannah Arendt* (Abingdon and New York : Routledge, 2014) の全訳である。ガンターは、教育政策、教育経営を主な専門領域とし、社会学、政治学、歴史学の視点から、教育のリーダーシップや教師の力量形成といった教育経営の現代的課題を考察するとともに、教育経営の理論や理論史について研究を進めてきた。

著者は、教育政策や教育経営に関して幅広く深い見識を持つとともに、きわめて鋭く、また非常に問題提起的な議論を継続して展開している。彼女は、本学会にも2018年8月に招聘され、公開シンポジウム「スタンダード化時代の教育リーダーシップ」において基調講演を行なうなど、その精力的な研究が日本でも注目されてきた(同基調講演の内容は、2019年の本誌第23号に清田夏代会員により全訳され、公開されている)。

著者の主著には、*Rethinking Education : The Consequences of Jurassic Management* (London : Cassell, 1997), *Leaders and Leadership in Education* (London : Paul Chapman, 2001), *Leadership and the Reform of Education* (Bristol : Policy Press, 2012), *An Intellectual History of School Leadership Practice and Research* (London : Bloomsbury Academic, 2016), *The Politics of Public Education : Reform Ideas and Issues* (Bristol : Policy Press, 2018) などがある。なかでも、2001年の『教育におけるリーダーとリーダーシップ』は、教育経営研究のあり方に一石を投じ、刊行後、多くの関係者から注目を集め、様々な反響と議論を呼んだ。同書は、新自由主義的な教育政策が教育の統治に与える影響を分析し、それらが教育の専門職やリーダーシップに対していかなる問題を投げかけているかを批判的に考察したものである。同書の社会批判的なアプローチは、本書『教育のリーダーシップとハンナ・アーレント』においてさらに精緻化されている。

本書は、パット・トムソン (Pat Thomson)、ヘレン・M・ガンター、ジル・ブラックモア (Jill Blackmore) が編者となって企画・刊行している「シリーズ 教育のリーダーシップ、マネジメント、アドミニストレーションの批判的研究 (Critical Studies in Educational Leadership, Management and Administration Series)」の一冊として出版されたものである。章構成は次の通りで、下記のほかに、「略語一覧」「日本語版序文」「シリーズ序文」「謝辞」「文献案内」「訳注」「訳者あとがき」「文献一覧」「索引」から構成されている。

- 第1章 ハンナ・アーレントを取り入れる
- 第2章 ハンナ・アーレントとELMAの研究および実践
- 第3章 アーレントを使ってELMAについて思考する——政治と全体主義
- 第4章 アーレントを使ってELMAについて思考する——〈活動的生〉
- 第5章 アーレントを使ってELMAについて思考する——〈観照的生〉(デイヴィッド・ホールとの共同執筆)
- 第6章 アーレントとともに／抗して思考する

本書は、ハンナ・アーレントの著作に依拠して、現代における教育のリーダーシップ、マネジメント、アドミニストレーション (Educational Leadership, Management and Administration : ELMA) の研究と実践のあり方を根本的に問い直そうとする試みである。ELMAは、社会状況の変動の影響を強く受け、新自由主義的な改革の時代にあつては、現代化^{モダナイゼーション}の名のもとに、これまでの教育の目的や価値、その運営方法が公教育の市場化や解体というかたちで大きな転換を余儀なくされ、ELMAの〈複数性〉はますます縮減される。その結果、制度化された統治をともなう改革の試みが、より正統性を持つものとして社会のなかで受け入れられる。

著者は、こうしたELMAの問題状況に迫る視点として、知識産出 (knowledge production) の過程に着目している。さらに、この知識産出の過程について、著者は、アーレントの思想に着想を得ながら観^{アイデアズ}念と行^{アクション}為という概念で捉えようと試みる。こうした視点を導入することで、著者は、ある特定のELMAに関する観^{アイデアズ}念や行^{アクション}為の様式が、国際的・国内的に流通し、その支配が浸透するなかで、〈複数性〉がいかに損なわれ、いかにそうしたものに対する異議申し立てができなくなってしまうかという状況を考察しようとしている。

以上のような研究視点のもと、本書の第1章では、まず、アーレントがどのような人生を歩み、いかなる著作を著わしたのかといった導入から始まり、著者がなぜ現代のELMAを検討するためにアーレントの思想を取り入れるのかということが語られている。ELMAの領域の分析に、アーレントを参照するという点について、一見無謀と思われる読者もいるかもしれないが、こうした受けとめ方については著者自身も自覚的である。たとえば、著者は、アーレントにいかに向き合うかについて、次のように述べている。「政治への焦点化と彼女の仕事によって生まれた様々な論争を尊重し、その思想と文脈とを適切に捉えるために彼女の著述を通して手がかりを得ることは、著者としての私の重要な課題である。私は、アーレント自身が創出したのではない原理を構築したり押しついたりすることで、彼女の思考を体系化しようとは思わない」(39頁)。その代わりに、著者は、アーレントの思想と方法を捉える手段として、アーレントの回りくどさに丁寧につきあい、彼女の思考の相互のつながりを跡づけることを試みたい、としている。

なかでも、著者は、アーレントが〈活動〉と政治的生の〈複数性〉とにいかに取り組んだかに着目している。アーレントにとって〈活動〉というのは政治的で公共的である。そこでは個人が自己について表現し、議論が生まれ、〈出生〉の可能性が現実のものとなりうる。また、アーレントの全体主義に関する議論も参照され、そこから、本書の議論における問題関心が「ELMA

を実践する人との関係でELMAを理解していくことであり、教育や子どもに損害を与える改革への従事がいかに命令に従ったものとして特徴づけられるかを理解していくことである」(42頁)と述べられている。さらに、アーレントの『人間の条件』における〈労働 (labor)〉、〈仕事 (work)〉、〈活動 (action)〉の区分が着目され、それらの視点から、ELMAに対する理解と、現代では〈労働〉が支配的になっていくというアーレントの主張が参照されている。本書で「社会科学が果たす重要な貢献は、^{アイデアズ} 観念と ^{アクション} 行為をより広い文脈に関係づけることである」(62頁)と述べられているように、アーレントの重要概念を用いて現代のELMAの問題に迫ろうとした著者のねらいがここで見えてくる。

続く第2章から第5章においては、アーレントの代表的な著作を手がかりとして、現代の英国の教育改革やELMAの現状が検討されている。

第2章では、アーレントの「政治における嘘」を参照して、ELMAのなかから発生し、そしてELMAとともに展開してきたものとして「国境を越えたリーダーシップのパッケージ (Transnational Leadership Package : TLP)」が考察されている。著者によると、TLPとは、国内の文脈に当てはめられたグローバル・ビジネスであり、研修や人材募集、またコンサルタントの支援を受けた組織効率性と効果性に関連するものである。

ここで、著者が問題と捉えているのは、「たとえば、教育サービスを民営化すること、公教育のカリキュラムを基礎的労働技能に宛てがうこと、そして^{ワークフォース}労働人員を脱専門職化すること」(83頁)が可能になっているにもかかわらず、ELMAが通常、「自明の理」として示されることである。そこでは、教授・学習活動が、組織過程としてリードされ、経営され、管理されなければならない、という常識的な考えが生み出されることが問題視されている。このような前提のもと、第2章では、TLPが英国でどのように機能し、そしてなぜ機能するのかについて、2000年代のアカデミー・プログラムや「学校のリーダーシップという戦略 (a leadership of school strategy)」が対象とされ、批判的に考察されている。

第3章では、アーレントの『全体主義の起原』、「教育の危機」、「リトルロックについての考察」を踏まえながら、〈複数性〉と^{アイデアズ} 観念の交換とに関するアーレントの主張が考察され、その主張が自由の問題とどのように関係づけられているかが検討されている。その上で、TLPを通じた専門的実践の植民地化が、全体主義が展開する状況として分析されている。

アーレントの全体主義論との比較から、著者は「教育についての^{アイデアズ} 観念や ^{ディベート} 議論のなかにある〈複数性〉がどれほど蝕まれ、実際にはどれほど愚弄されつつあるかということは、公教育への責任を負う専門家たちに対して向けられる情け容赦のない厳しい批判を見れば明らかである」(114頁)と述べている。その上で、次のように続ける。「アーレントが論じるように、〈出生〉は「教育の本質」である。それゆえ、世界に生まれてくる新しい人びとを教育する必要がある。しかし同時に、私たちは、彼らが世界を更新するのを妨げるべきではない……ここで中心をなすのはまさに、どのようにしたら政治が多元的な仕方理解され、実践されるかという問いである」(117頁)。

第4章では、主に『人間の条件』に依拠して、インタビューをもとに〈労働〉、〈仕事〉、〈活動〉の性質が考察されている。その際、〈活動〉と政治が重要であると主張するアーレントの諸

議論があらためて確認されるとともに、^{スクール・ワークフォース}学校の労働人員の構成、専門の実践の性質、さらには専門的アイデンティティを構築する経験のなかで起こる^{エージェンシー}主体性と^{ストラクチャー}構造との間の相互作用が考察されている。

たとえば、ある学校において教職員が「耐え忍ぶために必要な事柄を産み出し消費する」(156頁)という事例が示されている。「それは、創造性や耐用寿命を一切持たず、職務をこなしその^{プロダクト}産出物を消費するという差し迫った必要の充足を超えることなく、周期的に反復される。それゆえ、変革のプロジェクトを設計し遂行する際に、カリキュラムにおける創造性や教授上の^{イノベーション}革新に基づいて、現状に異議を唱えるようなことがまったくない。それどころか、職務を維持するために必要な事柄を済ませていくということが要求される」(156頁)と考察されている。そして、事例校において「自由裁量の余地を求めようとする試みがまったく存在しない」ことを著者は問題視し、「いずれの学校においても強調されるのは、物事を的確にこなすということである」と述べている(157頁)。

このような状況を踏まえて、著者は、「学校は学習者としての子どもたちよりも、市場化と利潤追求型の発展の方を優先させる人びとのなす決定に対して専門的な正統性を与えている。どちらの学校も学校改善に取り組んでいると思ひ込み、みずからの実行していることが子どもたちのためになると言い張るかもしれない。けれども実際は、教育の機会をテストと説明責任の^{レジーム}体制に置き換えている。したがって〈労働〉は、^{アクティビティ}活動が激化するということ以上の意味を持つ」(158頁)として、公共サービスとしての教育が解体されていくなかで起こっている、より大きな変化に結びつけた考察の必要性と、「政策過程のなかには人びとと^{アイデアズ}観念との〈複数性〉が存在する必要があるだろう。教育の目的を強調するなら、まずは異なっているということが出発点とならなければならない」(184頁)と述べている。

第5章は、マンチェスター大学のデイヴィッド・ホール(David Hall)との共著で、『エルサレムのアイヒマン』を中心とするアイヒマン裁判に関する考察や『精神の生活』などのアーレントの思想に依拠しながら、教育の過程において^{ナショナル・スタンダード}全国基準や^{メトリクス}指標という考えが支配的になる状況下の、主体をめぐる問題、とりわけ思考、判断、〈活動〉の関係性が考察されている。

その際、特にアーレントの全体主義の状況下における人間の条件についての分析が注目され、分散型リーダーシップ(distributed leadership)のような新自由主義と新保守主義の教育改革プロジェクトについての加担と抵抗という課題が考察されている。著者はそのような考察のねらいを次のように述べる。「一見すると正常であるものの、より詳しく調べてみると危険なほどに異常であるかもしれないものについて考察するつもりである。公共サービスとしての教育は、イングランドでは不安定な状態にある。私たちはアーレントに倣いながら、すべては可能である——公共サービスとしての教育の破壊さえも——ということを理解しようとするをもって、責任を真剣に引き受けている」(199頁)。

最後の第6章では、アーレントの思想を踏まえながらも、その思想に対していかに批判的に向き合っていくかにまで踏み込まれている。そこから、アーレントを取り入れることの意義が再び示されている。その際、アーレントの「社会的なるもの」や「ブーメラン論」の視点が用いられ、教育経営における^{セキュリティ}ジェンダーや安全性の問題が考察されている。ここから、アーレントの思想が

今日の政治問題にまだまだ十分に語りかけ、現代の教育経営の知識産出の探求に向けて活用できるとの考えが著者によって示されている。そして、「ELMAは、研究と実践の領域における知識、知ること、知る者の〈複数性〉(the plurality of the knowledge, knowing and knowers)に根ざした諸理論に取り組むことがほとんどできていない」(249頁)として、研究者が押し黙ってしまう現実や、問題に加担してきた事実に触れ、構造的かつ文化的に不利な状況について思考する必要性を指摘している。

以上は、困難な状況下にある英国の教育改革の現状を相対的に批判しているだけではない。著者は述べる。「教育に対するいかなる取り組みも次のようなことを意味している。すなわちそれは、大人たちが過去と未来の間にある隔たりに対して、そしてその隔たりのなかで、責任を担うということである」(262-263頁)。著者が本書の最後に確認しているように「本書を含むこのシリーズは、知識産出の目的と実践に関してELMAが自己認識を形成できるようになることを意図している」(264-265頁)。そして、著者はこう訴える。「アーレントとともに思考することではっきりしたのは、考えられないこと(the unthinkable)が現に生じているということである。つまり、学校は、子どもたち、家族、コミュニティから懸け離れたものとなりつつある。議論せよ」(270頁)。

また、著者は決して現在の状況に絶望しているわけではない。本書の終わりに著者が述べた次の言葉を私たちも真剣に受け止め考えていきたい。「目下次々と明らかになりつつある教育の破局的状況^{カタストロフィ}について、あなたが他者とともになそうとしていることを思考せよ、語れ、決断せよ」(271頁)。

本書シリーズ序文で著者たちが述べていたように、「いかなる教育機関であれ、それをリードするには、いまやこれまで以上に知的な仕事が必要となる……教育専門家は、政策処方^{レセプス}にただ従うだけではないということができなければならない」(28頁)。だからこそ、著者は、知識産出の過程にこだわり、当事者が異議申し立てを含め、意見を表明し議論、行動することの重要性を唱えている。本書を通じて一貫して感じるのは、教育専門家への信頼である。本書は、決して、現状に対する人びとの恐怖心をただ煽ろうとして書かれたものではない。本書は教育界の希望の書だと考えている。